

## 14. 前歯交換期にみられた逆被蓋の自然治癒例

○塩野 幸一，清水 久喜，甲斐 正子

(鹿大・歯・小児)

反対咬合は、前歯部の対合関係が逆になっていることが特徴的な咬合状態のことであり、当科外来では、これを主訴として受診する例は比較的<sup>1)</sup>多い。遠藤の報告によれば、反対咬合は増齢に伴って減少する傾向を認め自然治癒があることを示唆しているが、これとは逆に成長期を通じて増悪し、外科矯正の対象となる重症例もみられる。このように反対咬合の中でも成長過程における性格が異なることが判る。これは反対咬合を構成する不正要因の種類と程度によるものと考えられ、症例によって咬合管理の計画も異なってくる。

演者らは、当科初診時4歳11カ月ですでに乳歯列反対咬合で、前歯逆被蓋の改善が見込まれる女兒を保護者の了承のもとで約3年間経過観察を続け、永久前歯との交換期に逆被蓋が改善したのを最近経験した。

この症例の分析結果によれば、上顎前歯の唇側傾斜が大きく関与していることが判った。永久歯咬合の完成以前であるため、完全に治癒したとは言い切れないため、今後も経過観察を継続する予定である。

今回は、前歯被蓋の改善に至った経過と、不正咬合の治療方針を導き出すために考察された不正要因という考え方から考察を加え報告する。

文献1) 遠藤孝：下顎前突の疫学的研究，(1)下顎前突の頻度，日矯歯誌，30：73-77，1971。